

# 茗溪学園中学校高等学校

## Study Skills を身につけさせる教育 その 16 Social Skills (1)

教務部長 田代 淳一

教科内外の教育活動を通して Skill Training を行う茗溪学園では、Study Skills と同様に Social Skills も重視して指導しています。心理学や WHO など定義されている Social Skills は、茗溪学園流スタディ・スキルと多くの重複点があります。意思決定のプロセスや問題解決の方法、Critical Thinking の仕方や討論の方法などです。今回は茗溪学園ではなぜ Social Skills を重視するのかについてレポートします。

日本の学校では Social Skills についてはあまり聞きません。むしろ ADHD 児や LD 児などに対しての学習として紹介されることが多く、「対人関係上の問題を乗り越える技能、集団を楽しめる技能」などのようにとらえられていることが多いようです。日本で Social Skills が重視されていない背景として、友達づくりや集団遊びの仕方は小学校時代に近所の子ども達で遊びながら自然に身につけてくるものだという根強い認識があります。ところが、今の日本のいったいどこに、放課後近所の異年齢の子ども達が群れて外遊びをしている姿を見ることができるのでしょうか。地域の共生こども集団が存在しない現代ではこれらの Skill はトレーニングして獲得させる必要があります。

実は日本の学校はどこも、戦後はこの“集団指導”に力を入れて取り組んでいました。（戦前は学校＝勉強を教えるところでした）核家族化と高度経済成長で地域にこども集団を受け容れる余裕が無くなり、また共働きの家庭を支えるために、小学校から高校まで集団指導が盛んに研究され全国か

ら地域レベルまでたくさんの教育研修会が実施されていました。学級に生徒の核を意図的に作り出し、民主的な集団運営の方法を教え、実践させる。豊富な学校行事や部活動、部活動を通してそれを達成させていました。これは欧米の教育と比較してみるとわかる、日本の学校教育の大きな特徴でした。現在小学生から高校生のお子さんをお持ちの保護者の方が受けた教育です。

ところが、入学してくる子ども達の Social Skills が目に見えて低下し始めます。放課後の遊びは限定された友人とだけ屋内で電子ゲームをしているという子どもが増え、自分の感情や都合でしか考えられない子どもが増加します。スポーツ少年団などで異年齢集団でスポーツをしてきた子どもはその点はマシですが、大人主導の活動であるため本当の Social Skills に育っていない子どもがほとんどです。

さらにとどめを刺したのが 1990 年代あたりから始まる日本の“訴訟社会化”です。昨年マスコミを賑わした“モンスター・ペアレント”に代表されるように、自分の子どもが学校で不愉快な思いをした途端、その原因や経緯を無視して学校に苦情を持ち込む親が急増しました。（それに拍車をかけたのが今年の文部科学省による「いじめ」の定義の改訂です。子ども自身がいじめられていると感じれば“いじめ”になりました。）

このような、相次ぐ強敵の来襲と現場教員の多忙化で、日本の学校の“集団指導”はほぼ崩壊しつつあります。学級委員（HR 委員）を生徒の自発的な立候補と選挙で選んでいる学級、学級内の班づくりを立候補で選ばれた班長たちが自主的に行っている学級が国内のどこにあるのでしょうか。このような指導にはたくさんの指導ステップがあり、その過程では当然大きな対人関係のひずみが生じます。ぶつかりあい、こすれあってその中から「友人とは何だろうか」「リーダーはどういう資質が必要か」「周りでサポートする場合の大切なこと」「集団で尊重されるべきこと、がまんしなければなら



キャンプ：テントも自分たちで